

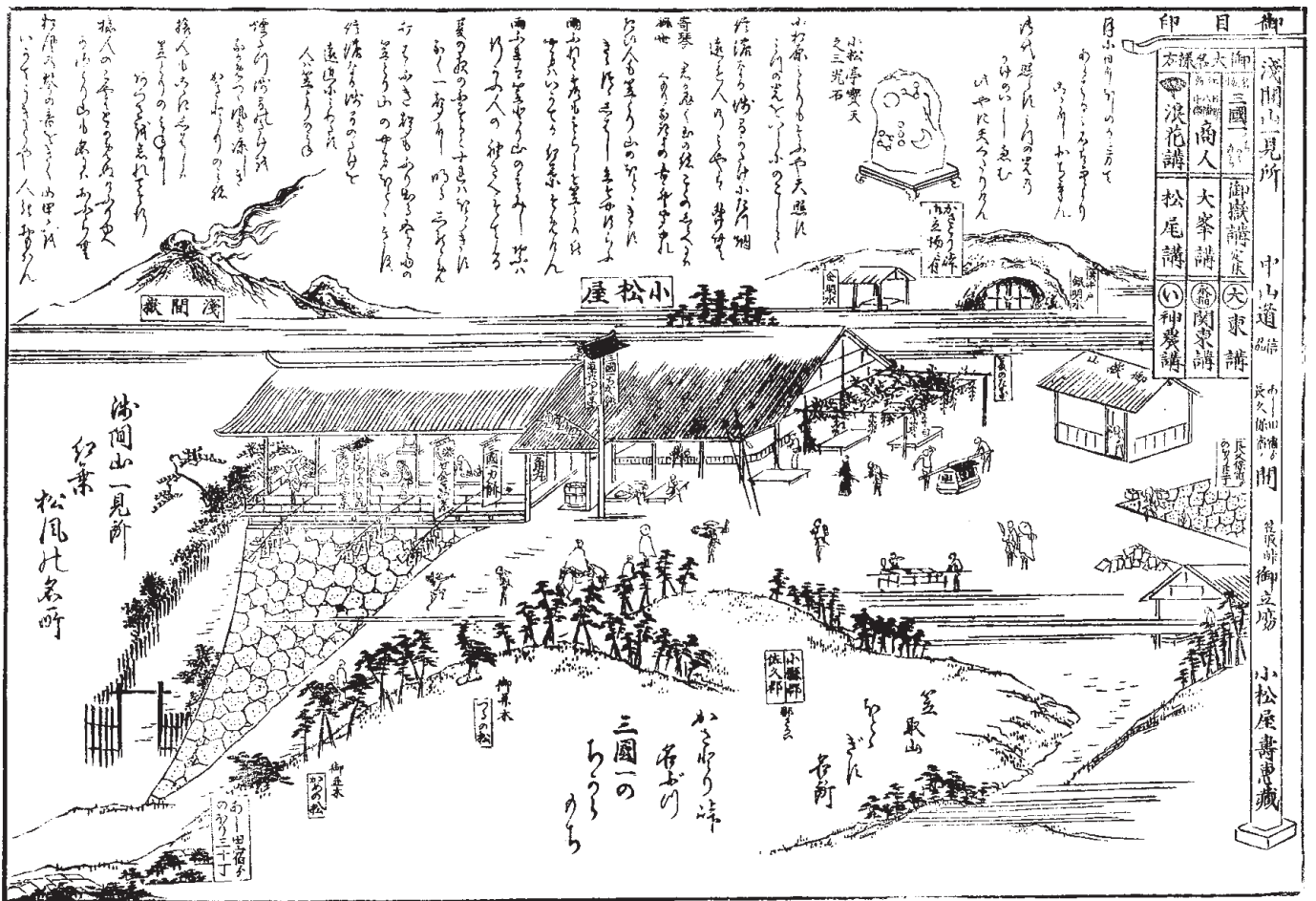
マツ並木歴史ばなしあれこれ④

前回、保存管理計画策定の際の調査によって、客観的な事実を記録することに主眼を置いた「図面」的な史料やマツ並木や笠取峠の景観認知を今日に伝えている「絵画」的な史料があり、「図面」的な史料として「芦田宿絵図」について紹介しましたが、今回は、「名所(などころ)」としての並木に対する認識を読み解く手がかりとなる「絵画」的な史料として、「笠取峠立場図」についてご紹介します。

「笠取峠立場図」は、この峠にあった立場(たてば)を描いた名所絵の一つと考えられ、右端の「小松屋壽恵蔵」名の看板と、中央の四角囲みの「小松屋」の屋号から、茶屋「小松屋」が土産品や宣伝広告等の目的で作成されたものではないかと推定できます。成立年次は不明ですが、江戸時代の末期には県内観光地で同種のもので作成されている事例(安曇野市中房温泉)もあり、描かれている看板に大名の利用を記している点と併せて考えますと、おおよそ19世紀中頃の成立と思われる。

この史料の中の二ヶ所で「浅間山一見所」とあることから、笠取峠を代表する景観は「浅間山」であったと思われます。あわせて、左端には「浅間山一見所、紅葉、松風の名所」、下端の「笠取山、ほととぎす名所」などから、笠取峠は、四季折々の山林の風情を視覚ばかりでなく、五感を通じて味わう名所であったようです。

※立場とは、宿場と宿場の間にあって、旅人や人足、駕籠かきなどが休息する場所



『笠取峠立場図』 竹内純一氏 所蔵 (原寸大は、25cm×26cm)